

# 自然を活用した保育・教育のあり方に関する研究 —北欧における自然を活用した保育・教育のあり方を通して—

A Study on Nature-based childcare and education

—As seen through nature-based childcare and education in Scandinavia—

高橋 泰道 ・ 杉山 浩之

(保育教育学科) ・ (広島文教女子大学)

キーワード：スウェーデン 保育 幼児教育 就学前学校 自然体験

## 1 はじめに

この度、2017年3月に「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂された。改訂のポイントとしては、これまでと同様に、「環境を通して行う教育」を基本としながらも、幼稚園教育において育みたい資質・能力を明確化することや、5歳児修了時までには育てほしい具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化するとともに、小学校と共有することにより幼小接続を推進することが挙げられている（汐見・無藤，2018）。

中でも、今回示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである「自然との関わり・生命尊重」には、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の次期学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（2016）を受けて、以下の通り、自然に触れ感動する体験の重要性や、生命の不思議さや尊さに気づき大切にすることなどが記されており、乳幼児期における自然とのかかわりの大切さが示されている。

○幼児教育は、幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした教育を実践することが何よりも大切であり、教員は、幼児の自発的な遊びを生み出すために必要な環境を構成することが求められる。

○特に、近年、少子化や都市化等の進行によって、友達との外遊びや自然に触れ合う機会が減少してきていることから、教員は、戸外で幼児同士が関わり合ったり、自然との触れ合いを十分に経験したりすることができる環境を構成していくことが重要となってきた。

このことから、自然の偉大さ、厳しさ、不思議さなど直接自然に触れる体験を通して子どもの心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、子どもが自然とのかかわり合えるように工夫することが重視されている。

以上の改訂の趣旨を踏まえて、これからの保育・幼児教育においては、自然を活用した保育・幼児教育の充実に一層重きが置かれると考える。

一方、近年日本では、ヨーロッパ、特にドイツを中心として広まった「森のようちえん（自然体験活動を基軸にした子育て・保育，幼少期教育）」が、長野県，鳥取県，広島県を中心に広がりを見せており，島根県にも数園存在している。（森のようちえんネットワーク，2018）また，スウェーデン王国を中心とした北欧では，自然環境教育として，「森のムッレ教室」や「テーマ・プロジェクト型保育」の取組が長く行われており，日本各地でもその輪が広がりつつある（森のムッレ協会新潟，2018）（岡部，2007）。

今回の「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」，「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂に伴って，今後，自然を活用した保育・幼児教育を行う上では，このような海外の自然を活用した保育・教育活動について学んでいくことが重要になると考える。

そこで，本研究では，環境教育やテーマ・プロジェクト型保育の先進国である北欧において，幼児期から児童期における自然を活用した保育・教育活動の実態を視察，分析することを通して，島根県内における保育園・幼稚園の自然を活用した保育・幼児教育のあり方に関する研究や，森のようちえんに関する研究に資するとともに，本学の授業（保育内容「環境」，生活科教育，理科教育，総合的な学習等）における教材研究を深め，学生への学修指導，及び保育士・教員養成に役立てることを目的とした。

本稿では，その内の環境教育やテーマ・プロジェクト型保育の先進国である北欧のスウェーデン王国における幼児期における保育・教育活動の実態について視察した結果を報告する。

## 2. スウェーデン王国の概要

北欧諸国は世界的に見て福祉の先進国として確固たる地位を占めており，子どもの権利や障害者権利などを保障する社会としても世界をリードする国々である。

スウェーデン王国，通称スウェーデンは，北ヨーロッパのスカンディナヴィア半島に位置する立憲君主制国家である。スウェーデンは，面積が約 45 万km<sup>2</sup>で，日本（約 38 万km<sup>2</sup>）より少し面積が大きい国だが，人口は約 950 万人（2017 年）と，日本（1 億 2700 万人）の 20 分の 1 以下である。気候は，亜寒帯に属する。比較的平らな国土で，山も 2000m 程で，自然災害の少ない国である。首都，ストックホルムは 14 の島からなり，湖や河川の多く，昔からの町並みがとてもきれいな場所である。

スウェーデンは，両親ともに長期間の育児休暇を取ることができ，1 歳までは各家庭で育児をすることになっている。1 歳以上になると，幼保一元化とな

り、学校庁が管轄している、1歳～5歳までの子どもが通う園である「就学前学校」に通っている。就学前学校では、保育所保育指針や幼稚園教育要領にあたる「ナショナルカリキュラム」に書かれている目標と内容を達成することを目指している。この「就学前学校カリキュラム」(2010, 2019年改訂予定)には、「就学前学校は環境問題や自然保護問題を重視する」ことが示されており、「エコロジカルな対応の仕方と将来へのポジティブな革新が就学前学校の事業に反映する。子どもが自然や環境に対して慎重に対応し、自然の循環過程に関与していることが理解できるよう寄与する。」ことが指導方針として挙げられている。また、子どもの発達の目標が以下のように明記されている。

- ・「自然のサイクルや人間と自然と社会がどのように影響しあっているかについて関心と理解を培う」
- ・「自然の科学や関係性の理解を育て、植物や動物、簡単な科学的作用や物理的現象の知識を培う」
- ・「自然科学について問題を提起しあったり話し合ったり、識別調査したり言語化する能力を育てる」

また、スウェーデンは、森の妖精ムッレを中心に自然保護を子どもに語り体系的な環境教育の発祥の国である。森のムッレ教室は、現在フィンランド・ノルウェーを中心に、ウェールズ、イングランド、スコットランド、ロシア、韓国、日本などに広がっている。また、グリーンフラッグ認証団体が推進する環境教育もスウェーデン発祥である。

さらに、一般的な野外保育を中心とする野外就学前学校(2017年193校)も存在する。さらに、自然享受権(スウェーデン王国の自然保護法では、「自然は全ての人のものであり、誰でも他人の所有の森や土地に入ってもよい、宅地以外なら他人の土地を歩いてもよい」とある)が認められた国としても有名であり、それを実現するために、享受される自然を保護する教育、即ち「環境教育」が行われている。また、子どもの権利条約(1989)では、「自然環境の尊重を育成すること」と規定されており、子どもの権利条約を世界で先駆けて教育に導入している。

### 3. スウェーデンの保育・教育活動の実際

今回スウェーデンでは、レッジョ・エミリアの考え方を受け継いでいる私立就学前学校(プレスクール)2園と、森のムッレ教室の教育を行っているムッレボーイと森のクニニュータナの2園、ムッレ教室を導入している就学前学校2園、野外就学前学校等を視察した。

このうち本稿では、レッジョ・エミリアの考え方を受け継いでいる私立就学前学校(プレスクール)2園と森のムッレ教室の教育を行っているムッレボーイ1園とムッレ教室を導入している就学前学校1園について報告する。

## 1) レッジョ・エミリアの考え方を受け継いでいる私立就学前学校の概要

### (1) メーラーフィデンズパルケン就学前学校 (Mälarhöjdsparken) (図 1)

本園は、ピッスリンゲン (Pysslingen) という民間が経営している就学前学校であり、ストックホルムの南部郊外の新興住宅地の中にある比較的新しい園である。園児数が 116 人で、縦割りの 8 グループ (13~15 人) で構成されている。スウェーデンでは、縦割りクラスが当たり前で、そのグループで、屋内と屋外の両方で活動をしている。園全体が森に囲まれており、園庭には、粒の大きさの違う砂場、ひろい芝生の遊び場、「サムリング」と呼んでいる「つどい」ができる場所などがある(図 2, 図 3)。

1 グループ 13~15 人には、3 人の保育士 (正規の保育士 1 人、準保育士など 2 人) が付いている。朝登校すると、縦割りのグループに分かれ、「サムリング」を行い、そこで、四季の歌を歌い、果物を食べ、今日一日何をするのかについての話し合いが行われる。先生の姿からは、子どもたちの活動を見守りながら、子どもたちの思いを基に見通しをもたせ、振り返りを行い、連続した学びを実現させようとしていることが窺われた。

この園では、レッジョ・エミリア・アプローチに基づいた教育を実践している。レッジョ・エミリアとは、イタリアの小さな街の名前であり、「世界で最も優れた学校 10 選」に選ばれた学校があることから、この街での教育法が注目されるようになった。市の税金の半分以上が教育資金にあてられているほど、街全体が教育に力を入れている。個人の個性や意思を尊重しながら、他者との関わり方も養い、感性を磨くことが基本理念とされている。子ども・先生・親が対等の存在として関わりを持ち、指図



図 1 メーラーフィデンズパルケン就学前学校



図 2 園庭の様子



図 3 サムリングをする場所

はせずと一緒に考えていくのが基本とされている。レッジョ・エミリア・アプローチには、「プロジェクト活動」、「ドキュメンテーション」、「芸術の力の育成」が特徴として挙げられる。

「プロジェクト活動」とは、日常的に子どもだけで話し合いの場や行動する場を持たせ、自分の意思は主張しつつ、相手とのコミュニケーションを通して、物事を進める力を養う活動であり、先生は同じチームのメンバーという位置づけになっている。プロジェクト保育は、カリキュラムを踏まえ、季節に応じて、子どもの興味・関心に応じてテーマを決めて、期間を決めて行う。活動の終わりは子どもの興味が薄れてきた時である。

一例として、「顔」をテーマにしたプロジェクト保育活動を紹介された。初めに自分の顔をペンで描き、次にフェルトと羊毛で表現する。そして、最後には石膏で表現していく。活動はいろいろな表現で展開され、いろいろな角度から学びを深めていることが窺われる（図4）。



図4 プロジェクト保育活動の様子

「ドキュメンテーション」とは、日々の生活を記録しようという試みで、先生と子どもの会話をはじめ、制作した作品まで日常生活の様々な出来事を、保育室などに展示するものである。現在、子どもの活動の様子を記録した写真や子どもの作品などの視覚資料を用いて保育活動を可視化し、それらの記録を集積して活動の振り返りの資料とする「ドキュメンテーション（documentation）」や「ポートフォリオ（portfolio）」の活用が広がっている（図5）。



図5 教育的ドキュメンテーションの掲示物

ドキュメンテーションの特徴は、子どもの活動の様子を記録した写真や保育者のコメントのほかに、活動の中で子どもが制作したアート作品が多用されて



いることである。子どもたちの作品は、プロジェクト活動の一環として制作されるが、それらは表現作品として扱われるのみでなく、さまざまなプロジェクト活動のドキュメンテーションに活用され、子どもの考えを仲間や教員などと共有する資料として中心的な役割を果たしている。こうすることで、子どもは日々の生活を振り返りながら生活し、次に生かしていくことができる。また、親が見ることができる場所にあるのもポイントである。

「芸術の力」とは、共同スペースなどで、子どもたちは常に音楽や絵画などの芸術に自由に触れることができるよ



図6 アトリエと子どもたちの描いた造形作品

うになっており、各分野専門スタッフを常駐させるなどすることにより、その内容は本格的なレベルのものになると話されていた（図6）。

先生たちは、1週間に1回は職員間でリフレクションし、それぞれの子どもにあう活動を提案したり、子どもからの要望を吸い上げたりして、子どもの学びを考えている。また、毎日の昼食時に、「教育的ランチミーティング」というのもあり、子どもの食事を一人の先生が見守る間に、その他の2人の先生が活動の様子を伝え合うなど工夫して情報を共有している。複数で担当できるメリットは、職員間で話し合い、知識を生かしあえることだと話されていた。

また、子どもとの話し合い、学びを共有し、振り返り、さらに学びを深めて、いろいろな角度から物事を見つめようとする姿勢や子どもの権利、民主主義の実現に向けて、子どもとともに学び合おうとする姿勢があるからこそ、実現できる活動であるとも話されていた。ミーティングを行い、子どもたちの活動についての振り返りと次への綿密な計画を立てて、子どもを支援している姿から、自らの取り組みに自信をもって取り組んでいることが窺われた。

園内の環境整備も充実しており、ドキュメンテーションの活用、活動の足跡の分析と共有、テーマを設定したプロジェクト学習など子どもの主体性を尊重した教育が行われており、学ぶことが多い視察であった。

## (2) フェルディナンド就学前学校 (Förskola Ferdinand) (図7)

この園は、ノルランディア (Norlandia) という民間の園が経営しており、「エコタウン」と呼ばれる都市開発地域にある。エコタウンとは、持続可能な社会を目指して都市開発が行われた新しい町である。

この園は、園児数 70 人で、異年齢の 3 つのグループに分かれている。園の目標は、「子どもの好奇心，創造性を目覚めさせ，自分自身の知性を確信すること。」であり，園では，就学前教育指導書，カリキュラムに基づいての指導を行っている。さらに，園では，全ての子どもたちが知的に生まれ，それぞれ異なるスキルをもち，子どもたちがお互いに学び合うという信念に基づいて，レッジョ・エミリア教育哲学にインスピレーションを受けた教育を実践している。

この園でも，レッジョ・エミリア教育の基本理念に基づき，子どもたちの興味や志向に基づいたプロジェクトを実施し，子どもたちの遊びを観察したり，分析したりして，実践の内容を振り返る教育的ドキュメンテーションを作成していた。また，各グループには独自のアトリエがあり，美術の専門講師もいた（図 8）。

また，この園では，前園と同様に，「自然物など様々な材料を生かして表現すること」「本物を描く，真似る」など芸術に力を入れると共に，光を使った造形遊びや様々な玩具を使った遊び，物を水に浮かばせる科学的な実験活動なども特徴的であった。また，環境に優しい（配慮した）生活を送るようになるための活動にも取り組んでいた（図 9）。



図 7 エコタウンにある就学前教育学校



図 8 光を使った造形遊びの様子



図 9 科学的な実験活動の様子

## 2) 森のムッレ教室の考え方を受け継いでいる私立就学前教育学校の概要

「森のムッレ教室」とは，スウェーデンの野外生活推進協会のヨスタ・フロム氏が 1957 年に始めたもので，妖精ムッレ（Mullen：土）が登場する環境教育であり，幼児から小学生を対象にした自然環境教育プログラムが作られている。これまで 60 年間に国民の約 20%（約 200 万人）以上が学習し，養成講座を修了したリーダーは約 7000 人存在する。生態系の循環性などを乳幼児から

学童期に至る発達過程に応じてカリキュラムを系統的に構築し、体験の中で理論が学習されていくものである。その目的は、「自然の中で楽しく遊びながら、エコロジーの理解の基盤を築くこと」「自然と自然享受権(自然のエチケット)に配慮する心を育てること」「身体能力の向上, 身体のコントロール」「自分の発見を刺激し, 自然の観察力をみがくこと」「自然感覚の中に, 自分のアイデンティティを見つけること」である。

この学び場の最大の特徴は、ムッレという森の妖精が「自然を大切にしよう」というメッセージを持って登場することである。ムッレの語源は、スウェーデン語で土壌を意味する「Mullen」である。土は地球上のすべての命の根源であり、人間もまた土とつながっているのだということを伝えたいという願いがムッレの名前には込められている。ムッレは子どもと自然との橋渡しの存在で、時にはリーダーによる手人形やペープサートで登場し、子どもたちと遊び、歌を歌い、自然について語ってくれる。ファンタジーと現実の世界を自由に行き来できる発達段階にある5～6歳児にとって、ムッレはスリルがあり想像力をかき立ててくれる存在なのである。

この森のムッレ教室は、野外保育中心の就学前学校と、一般的な就学前学校の両方において行われている。今回は、前者としてムッレボーイ園(1985～)、後者としてブレンニングレーベン園の様子について報告する。

#### (1) ムッレボーイ (森のムッレの要塞) 園 (I Ur och Skur Mulleborg) (図 10)

このムッレボーイ園は、園児 35 名、保育士 7 名と協力者 1 人、調理師 1 名で、野外生活推進協会のすべてのプログラムを取り入れた保育を実践しており、模範的存在である。スウェーデン初の野外就学前学校(1985 年創立)で、1990 年から現在の施設に引っ越しており、森のムッレ教育を中心とする保育を展開する私立保育園であり、国内外の森のムッレ教育を推進している。



図 10 ムッレボーイ (森のムッレの要塞) 園

入園希望者は非常に多いが、保育の質を確保するために園児数は定員内に抑えている。以前は2歳児以降であったが、保護者の要望があつて2年前から1歳以上から入園させ、国のカリキュラムに基づき、ムッレのプログラムを導入し、保育を行っている。前述の通り、スウェーデンでは、育児休暇が1歳まで全ての保護者に保障されているため、0歳児保育は存在しない。



園児の数を保育の質確保のため抑えるので、経営的には楽ではない。入園児の誓約書に「保育と清掃」の保護者ボランティアが明記され、保護者が経理を担当したり、遊具を作ったりと、保育参加し、保護者との共同経営の形を取っている。先生は、月一回ごとに全員（保育者）のリフレクション（保育の振り返り）会議が行われ、2週間に1回は、クラスごとでリフレクションを行い、ドキュメンテーションを作成している。労働時間 40 時間の内、36 時間は子どもと関わる時間、4 時間は会議などの時間としている。園長も週に一回、4 時間は子どもと関わる保育士になる。

新学期が始まった 8 月から毎日保育は外で行われている。園児は朝 7 時から順次登園する。4 時からお迎えがあり、5 時には園が閉まる。室内には 1 時間もない。天気に左右されることなく、火、水、木曜日は、森の中でテーマに基づいて遊ぶ。月、金曜日は園庭で遊ぶ。昼食も昼寝（1～2 歳児）も遊びもすべて外で行われる。1～2 歳児は昼食を園内で食べ、昼寝は屋外の屋根の下にあるがっしりとしたベビーカーで毛布などに包まれて顔だけ出して眠っている（図 11、図 12）。

3 クラス制で「クノッペン教室（1～2 歳児）」「クニータナ教室（3～4 歳児）」「ムッレ教室（5～6 歳児）」で編成されている。年齢に応じた発達に即した保育を行うということで、クラス分けしている。「クノッペン教室」（現在 8 人）では、通常 80m 先の森に出かけるが、もっと遠い森へ行くこともある。「クニータナ教室」が出かける森は複数あり、それぞれに子どもに分かりやすい名前を付けている（図 13）。

スウェーデンには、前述の通り、「自然享受権」という権利があり、自然の中のどこで過ごしてもよい。つまり、たとえ個人の所有地であっても、誰でも自由に森林や野原を通り、ベリー類やキノコやほとんどの植物を摘むことがで



図 11 園庭の様子



図 12 屋外にある昼寝用のベビーカー



図 13 森で遊ぶ様子

きる。原則として、他の人の邪魔をしたり、自然を傷つけたりしない限り、どこでも散策することができる。ただし、それには大きな責任を伴い、自然や野生の動植物を守ること、そして土地の所有者や他の人々への配慮を忘れないことなどのルールを守らなくてはならない。子どもたちは、広大な自然の中で活動し、心身ともに豊かになっていくことが想像できた。

## (2) ブレンニングエーゲン就学前学校 (Fröskolan Bränningevägen) (図 14)

この園は、園児 72 名、校長 2 名、保育士 12 名で、森のクニユータナとムッレ教室を導入している。1～5 歳の異年齢縦割りクラスを 4 つ編成しており、1 グループ約 18 人にそれぞれ 3 人の保育士が付く。ヴィゴツキー理論に基づく保育をベースとしている。森のムッレ教室を展開するときは、年齢別グループを編成して、テーマ学習に取り組む。プロジェクト活動も同様に「飛行機」「救命ボート」などテーマで話し合って学んでいく。スキーやスケートなども含めすべての野外活動を導入している野外就学前学校ではなく、一般的な保育活動を行う園であり、6:30～18:30 まで開所している。

今回は、1～5 歳までの縦割りクラスで、森に出掛けていった。森と言っても、スウェーデンには山はなく、丘陵の森に出掛けていく。今回の場所は、所々岩盤が露出した場所で、町中が見渡せる気持ちの良い所であった (図 15)。

子どもたちは、雨が降りそうな天気なので、準備万端にカッパを着た上で、大自然の中で、絵本を読んだり、「つり遊び」などのごっこ遊びをしたりと、自由にやりたいことをやっていた。子どもたちの喧嘩も少なく、遊びを楽しむ子が多く、保育者は仕事の満足度が高いということである。

自然享受権については、小さいときから教えているとのことで、森の中には、キノコやスズランなど毒のある植物もあることも教えているので、これまで事故は起こっていないということである。

一方、先生たちは、子どもたちを見守りながら、絵本を読み聞かせたり、支



図 14 ブレンニングエーゲン就学前学校



図 15 丘陵の森の様子



援をしたり、記録を撮ったりしている。その記録は、すぐにドキュメンテーションによって、可視化され、園内や校内に掲示されて、子ども、教師、保護者によって共有されていく(図16)。

近隣の園も、かつてエコシティーとして開発された建築マシジョンが多い住宅地という同じ環境にあるが、野外保育をほとんど行わない園もある。ス

ウェーデンには野外保育園は200園程度あり、一般園にも野外保育を行う所とほとんど行わない園があるのは興味深い。前述したムッレボーイの隣の園もほとんど園外保育は行っていないということであった。保護者のニーズもあるので、多様な保育が展開されているようである。ただ、公立園では教育的ドキュメンテーションが導入されているが、どんな保育方法・内容でも子どもの活動を振り返るドキュメンテーションの作成は可能であるということだった。



図16 丘陵の森での活動の様子

### 3. おわりに

今回のスウェーデンの視察では、他にもプレスクールや小学校などの環境教育活動を支援している団体であるグリーンフラッグ(持続可能な社会を目指して、幼児期から環境保全の意識を養うための教育支援施設)や、野外活動センターも見学したが、詳細は紙面の都合で割愛する。

今回は、北欧の特にスウェーデンにおける幼児教育の展開事例を数例報告した。今回の調査報告では、以下のことが指摘できる。

- ①子どもの権利条約を土台とした保育制度が浸透しており、子ども約5人に1人の保育者の割合である。日本の制度のあり方を再考する必要がある。
- ②保護者や子どもたちが保育活動の決定に参画し、カリキュラムに影響を与えるという仕組みが実践の場に定着している。保育者は実践しながらカリキュラム構成や子どもとの関わりにおいて専門知識や技能を成長させることが可能である。ランチミーティングやリフレクションなどの取組から、保育者の働き方の見直しと研修の工夫が必要である。
- ③園の周囲には遊びに適切な自然環境があり、1歳児から5歳児まで野外中心の保育を展開する実践が多く見られた。幼児期における自然体験の意義と効果について、改めて整理する必要がある。
- ④ほとんどが異年齢縦割り保育であり、同年齢クラスはほとんどない。1～4

歳や1～5歳クラスで1グループ10～15人ぐらいで活動している。異学年縦割りの良さを整理していく必要性がある。

- ⑤スウェーデン野外生活推進協会の「森のムッレ教室」は、ムッレボーイ園のようにムッレ教育中心の園だけでなく、一般園にも活動が展開している。
- ⑥活動の流れ・成果や意義などを写真や文字で可視化してまとめるドキュメンテーションの手法は、レッジョ・アプローチの教育だけでなく、森のムッレ教育にも活用されている。プロジェクト活動と共にさらにその手法について整理していく必要性がある。

以上、今回の視察を通して、スウェーデンの保育・幼児教育の概要を学ぶことができた。日本との制度や文化の違いがあるため、このような自然を生かした保育・幼児教育を全て真似することはできないが、その意義を改めて整理し、日本の保育・幼児教育で生かせることを考えていきたい。

#### 【参考・引用文献】

- ・アレッサンドラ・ミラーニ（著）水沢透（訳）：「レッジョ・アプローチ」．文藝春秋．2017
- ・岡部 翠：幼児のための環境教育―スウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」―．新評論．2007
- ・汐見稔幸・無藤 隆：「〈平成30年施行〉保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント」．ミネルヴァ書房．2018
- ・スウェーデン教育庁：「就学前学校カリキュラム」．2010（2019改訂予定）
- ・杉山浩之：「乳幼児期の環境教育の研究～スウェーデン型自然保育『ムッレ教育』をESDの視点から分析する～」．『広島文教教育』第32巻2018
- ・スティーナ・ヨハンソン（著）高見幸子（訳）：「自然のなかへ出かけよう」．日本野外生活推進協会．1997
- ・中央教育審議会：答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の次期学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」．2016
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省：「平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領」原本．チャイルド本社．2017
- ・無藤隆：「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」．東洋館出版社．2018
- ・森のムッレ協会新潟：「身近な自然と遊んで育つ保育実践～スウェーデンの自然環境教育から～」．わかば社．2018
- ・森のようちえんネットワーク：<http://morinoyouchien.org/>（2018.12取得）